※できる限り、原文を尊重しましたが、不明な字句等については？？？とした。
※現在の手段、方法と異なる場合や、学校名・場所が異なる場合などは補記した。

　１２月７日１３時３５分過ぎ、突然地震が起こり、家屋は激しく揺れ動きました。
　ウィーヘルト地震計の東西動の軸針は折れてしまい、地震計室と事務室の南北振り子の振り子時計は止まってしまいました。

　屋外にある水槽の水は溢れ、測風塔と鉄筋コンクリート柱に結ばれているアンテナ線は硝子碍子（ガラスがいし）が破損したため切れ落ちてしまいました。
　（測風）塔内にある風圧計の橋脚は一本折れて壁に向かって倒れました。卓上にある自記風信器はずれ動いています。

　直ちに、（測風）塔上に駆け上がり海岸の状況を見たところ、何等（なんら・・・）津波の現象はありませんでした。しかしながら、万一のことを思い、市内（当時は尾鷲町内）へ注意を与えようと考え、電話を掛けようとしましたが電話局からの応答はありませんでした。（この当時は、電話局の交換手に「電話を掛けたい」と申し込む方法だったのです。）

　まもなく、市内（尾鷲町）の国市の浜に白波が見えてきました。陸上に向かって流材が押し寄せてきたのです。時に１３時５０分です。
　避難者は、次々と銀杏（いちょう）町から女学校方面に（現在の尾鷲高校）向かって走る者がいます（見えています）。中村山に上がる人もいます。また、間もなくすると、浜に帰る人もいます。津波の再来を注意し、その後、２５分が過ぎたところで津波が襲来しました。（押し寄せ津波は毎回）毎々、尾鷲湾内の防波堤が見え隠れるくらい打ち寄せて、１６時１３分に終わりました。

　電話は依然として不通で、１４時に観測した気象電報を託信（送信）することができませんでした。このため、自転車に乗って（朝日町の）電話局へ行こうとしましたが、電話局近くは５０センチくらい浸水しており寄りつくことができません。このため、託送（気象観測したデータの電報発信）は遂に不可能と判断しました。

　地震と同時に市外電話、電信、汽車も不通となり、夜になっても電気はだめで電灯も無く、また、充電もできませんでした。

　翌日の８日、被害調査に出かけたところ、（尾鷲）町内の新町、北川（河川の名前です）付近にあった家屋の倒壊や流失等は甚だしく、大小（２～７０トン）船舶５５隻が上陸し、悲惨で屈辱的な状況になっていました。
　※原文　「大小（マー７０？）」は船の重さと推測して補記を行った。

＜ここまでが、当時測候所員がみたり、体験した状況＞

（居合わせた）海軍将校に話を聞くことができました。彼が言うには、津波が最も高い時には防波堤の南端にある灯台の監燈部の下まで、津波の先端が直接打ち寄せたということです。津波の方向は、東寄りの港の岸壁からおし寄せてきました。直ぐに陸上まで押し寄せて、家屋をあっという間に浮き上がらせて上陸（遡上）したのです。船舶が家屋にぶち当たり倒壊をさせました。次の引き波によって、壊れた家屋は流失してしまいました。

北川筋の被害がとても大きく、北川には２箇所の鉄筋コンクリートの橋がありますが、これに船や家屋の倒壊したものが引っ掛かって堰（せき）となり、津波が北川（川そのもの）を上がることはできず、西側に向きを変えて押し寄せたのだろうと思われました。
この付近に岸壁にあった水産試験場や松下工場の残された建物は浮かないことから、さらに船舶が押し付けたのだろうとみられます。

＜ここまでが、海軍将校から聞き取りした被害状況の記録＞

津波来襲時刻について（測風塔より防波堤を見た状況）

第１回	１３時５０分
第２回	１４時　７分
第３回	１４時３３分
第４回	１４時５８分
第５回	１５時３３分
第６回	１６時１３分

墓石の倒れ
古戸、矢の浜付近では、不安定な墓石が南または北向きに倒れていました。（墓台の基礎がしっかりしていた墓石）安定していたものは東よりから北に向いていましたが、動揺？回しているのが判りました。

浸水について

中井浦	尾鷲郵便局付近	５０㎝～７０㎝
北浦	尾鷲神社前	６８㎝～１０５㎝
南浦海岸	漁業組合	２５５㎝
南浦海岸	松下工場	２９０㎝
南浦海岸	水産試験場	２８０㎝
矢の浜	人家	１３５㎝
国市の浜	造船所	２７３㎝

土砂崩壊について
尾鷲～木本間で道路崩壊が６６箇所ありました。省営バスは開通していません。
※なお、省営バスとは鉄道省が経営管理していたバスで、バスは当時、難所の矢ノ川（やのこ）峠を抜けて走り、尾鷲から熊野までの間を２時間４０分余りで１日６往復していたとの記録があった。

地震（そのもの）による家屋倒壊について
なし

地割れについて
海岸にできたる間なるも、浪（波）のため不明です。そのほか、所々に小さな地割れがありましたが、よく注意していないと判らないような状況？です。

汽車不通について
発震と同時に線路へ土砂崩壊があり不通となりましたが、９日朝には復旧し開通しました。（８日の晩には紀北町の相賀駅まで通じていました。なお、紀勢線について当時、尾鷲駅から熊野駅までの間に鉄路はまだありませんでした。紀勢東線と紀勢西線に分断されていました。）

電灯について
津波のため、電灯公社（現在の電力会社の送電所）が流失したことから送電されていません。１０日の晩より仮照灯が設置されましたが、発電ボルトが低いことから薄暗い状態です。

電信について
発震と同時に不通となりましたが、８日１５時より電報を打てるようになりました。

市外電話について
１０日１８時まで不通でした。

地震後の生活
避難者は親戚、学校、寺院等へ寄宿し、（尾鷲）町民は？？より、勤労作業隊（現在のボランティアさんにあたる方含まれるでは）や各隣組（自治会のことです）より人々が繰り出して、復興に従事しました。

地震後の潮の満干潮に異変があったことについて
当区内沿岸一帯は地震後、６０㎝～７０㎝くらい満潮時・干潮時の潮位が高くなりました。？？？に浸水と地盤の沈下と推定し対策中としました。

地震前の予感
井戸の（井戸水に）異変があったほかは、ありませんでした。

＜被害状況とライフラインの復旧状況等を示した記録はここまで＞

平成１７（2005）年１０月２１日　　尾鷲測候所主任技術専門官　清水記